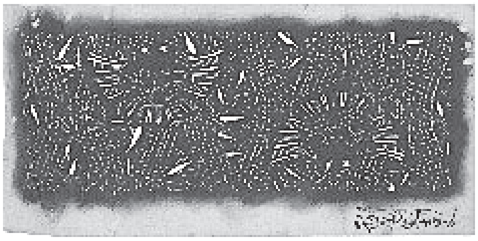
創刊記念特別寄稿

甦れ！日本の伝統文化
江戸時代の職人魂に想いをよせて

田内 隆司
（株式会社　田内設計　代表取締役）

出会い

私が初めて京小紋の型紙に出会ったのは、５年前のことでした。型紙の製造販売店、㈲野村松商店野村幸雄氏が、104枚の型紙を持って、事業の再生方法について型紙の活用方法の相談に来られた時です。伝統産業の衰退と共に、着物の型染に使われる型紙の職人や製造業者も苦境に立たされている状況下でした。



江戸時代型紙

型染と型紙のあゆみ

型染の歴史を顧みれば、古くは奈良時代（710 ～ 794年）にまで遡ります。また、型染に必要不可欠な型紙「伊勢型紙」の起源もこの頃であり、その時代時代の職人達の工夫や技術道具等の発展により、様々な変遷を経て現在に継承されています。

型染に関連して後世に大きな影響を与えた出来事に、江戸時代における「友禅染」の考案が挙げられます。元禄時代（1688 ～ 1703年）、扇絵師の宮崎友禅斎の描く扇絵が人気を集めていたため、彼はこの技法を着物の模様染の分野に生かしました。

この技法の発見の裏には、この時代に出された、「奢侈禁止令」があります。着物に対する、金紗や刺繍、総鹿子などの模様は禁じられていました。これに対して、職人達は禁令には触れずに、それでいて美しい染物を創りだそうと努力を重ねました。その結果、絹織物の白布に多色の染料を用いて絵を描き、染め出す技法が生まれました。

これが、多彩な模様を持つ伝統的な手描き友禅染の始まりです。それまでの染料液に布地を浸して染める「浸染」という方法から、染料を筆や刷毛につけて部分的に彩色した上、地色を染める「引染」という方法に変わりました。しかし、手工業による生産量は、大変少量でした。

友禅染が広まったとはいえ、限られた地域や人々への供給に留まっていました。その後、手描き友禅染の染色技術と、型染が融合され、その技法が地域ごとに名前を変え、「江戸小紋」、「京友禅型染」、「京小紋」、「沖縄紅型（びんがた）染」、「注染浴衣」

等の地域産業を誕生させました。また、陶器の絵付けやすりガラスにも型紙が用いられるようにもなったのです。

型紙の新しい分野への活用と共に、型紙の製作方法にも様々な技術や道具が考案されていきました。一方で、鈴鹿市（白子村・寺家村）を中心に、型紙売りの「株仲間」（同業組合の一種）による専売体制が形成されました。流通する仕組みの構築と共に、型紙産業は全国的に発展していきました。こうして、現在の伝統産業の基となるアイデンティティが育まれていったのです。

これらのことは、正に日本版産業革命の前夜であると言えます。型紙という道具により同じ物が大量に、速く製作することが出来るようになったのです。多くの職人達の創意工夫や連携により、日本の伝統産業が庶民の中からスタートしたのです。そして、日本版産業革命の足音は、その時代の職人たちの心意気や魂と共に、明治時代に大きく開花することになります。

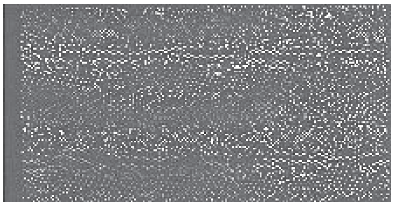
型友禅染

明治時代になると、型紙と化学染料を用いた技法「型友禅染」が、広瀬治助によって考案されました。広瀬治助は、元々、模様の部分に小さな刷毛や筆で染料を塗っていく、挿し友禅の名人でした。その一方で、華やかで美しい友禅染の着物を、より多くの女性に着てもらいたいという願いから、型友禅の研究を進めていました。そうして完成したのが現在の型友禅です。

当初は、挿し友禅に比べて技術が未熟であるとされ、邪道扱いされていましたが、治助はさらに研究を重ね、技術を確立させました。物によっては十数枚、あるいは百枚を超える型紙を使って型染独自の美しさを表現し、染色技術の幅を広げていったのです。扱いやすい化学染料と大量生産を可能とする型紙による印刷という技術の発展で、友禅染の着物が民衆にも広まることとなりました。

型染友禅の技法は、明治時代の産業革命以後も、時代時代の染職人や技術者によって、引き続き考案されて行きました。こうして、染めの技術は次々に発達し、職人はその技を使い分けることによって、豪華多彩な模様を描いていったのです。例えば、型紙においても、昔からの柿渋を塗った渋紙から、地紙製造の際に「糸入れ」が施された型紙へと移行し、最終的に、絹の網を漆で貼り付けて補強した「紗張り」の型紙が考案されました。

その後、カメラが発明されたことにより、型染めは大きな変化を迎えます。カメラ写植による写真型紙が開発され普及していくと同時に、職人達にはこれに負けないだけの手彫りの型紙が求められました。職人達はその要望に応えるため、業を磨き、熟達した技を発揮しました。そのため、型紙それ自身だけでも、精緻で、細やかな美しさを持っています。その技術は世界に誇れる水準に達しており、人間国宝に認定された方々の型紙も多く利用されています。



人間国宝製作型紙

国内生産の衰退

しかし、現代、時代の要求、知恵による

技術の発展及び変革は、経済の発展と変化、人の心や職人魂に変化をもたらしました。人々は、何の疑問も感じずに、効率を追求することに明け暮れ、先達の残してくれた業や知恵という恩恵を忘れていきます。その結果、大量生産や売れ筋商品の模倣に明け暮れ、最終的には、人件費が安い外国での型紙の製作や、着物の製作を始めたのです。日本の伝統的な、染めや型紙製作の技術と産業が、日本には残らず、外国に流出するようになりました。国内の着物の需要も減ったこともあり、京都にひしめいていた染関係の会社も大幅に減り、友禅染や型染に必要な型紙の製造や販売に関わる職人も、廃業に追い込まれる時代となりました。そこには、近年の生活様式の変化による着物離れだけではなく、手彫りに代わる写真型の技術の確立や、外国での製造が常となったことによる、型紙の国内生産の衰退があります。

時代の変化、技術の変化が産業革命をもたらしましたが、その一方で、手作業による人の汗や苦労と、「何くそ、やりあげてやる」というような職人魂をなくさせてしまいました。

その時代時代の、幾多の危機を乗り越えてきたのは、先達の努力と職人魂が、伝統産業を確立してきたということです。その経験と知恵は、そして、職人同士の連携と協力は、いかなる危機も困難も克服する力を持っていることを忘れてはいけません。

型紙の価値を取り戻すために

私は型紙職人から相談を受けるまで、型紙の存在すら知りませんでした。もちろん、型紙の実物を見たこともありませんでした。着物は知っておられる方でも、その製作材料や型紙といった現物を目にしたことのある人は非常に少ないと思います。そのような私が相談を受けてまず行おうと思ったのは、衰退する着物業界の型紙の価値の再構築です。本来は、着物を作るための道具である型紙をどうすれば新しい事業、ビジネスにすることができるのか。様々な観点から見るため、多様な専門家に相談に行きました。まずは、型紙の存在、実物を知って頂く機会を作ることが大切であると考えていました。また、同時に店舗に並べることができるような製品を生み出すことも大切であると思いました。そこで、京都で伝統産業に携わる多くの職人の方々と小紋型紙を活用し、製品開発を進めようとしました。

製品開発を進めるにあたり、古い時代の知的財産の権利は、現在どのような状態に置かれているのか、法的にはどのように解釈されるのか、調べてみました。するとどうでしょう。何の権利もなく誰でもが自由に使用できるのです。特に着物の世界では、一からデザインを考え出すことは、非常に少なくなっており、既存のデザイン帳から、一部色柄を替えて別製品として、売り出すのです。デザイン料、知的財産権といった権利はその製品だけに存在している、という状態です。日本の着物産業は、廃れていっても仕方がない状況を自ら作りだしている状態でした。このような状況に置かれ、朽ち果てようとしている江戸時代の型紙に、どのようにして、新たな生命を与えるか。その法的処置について、関係者の方々に知恵をお借りしました。そうして、意匠登録や実用新案申請を行えば、費用ばかりが掛かり、実を得ることが出来ないことも分かりました。

その解決のため、弁護士や公証人、弁理士、あらゆる専門分野の先生方にアドバイスを頂き、対抗要件の確立の方法を教えて

頂きました。それは、新しい技術や製品考案を登録することにより、新しい権利が発生するという権利の構築方法でした。このことは、弱小企業にとって非常に有難いアドバイスでした。

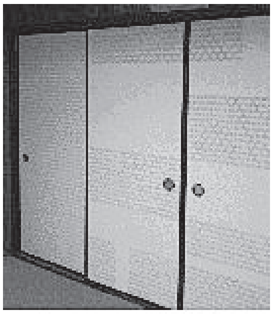
型紙をデータベース化

また、それと同時に、型紙の価値を高めることが必要であると考え、型紙の持つ意味や謂れについて調査研究し、データベース化を行ってきました。その作業を行う内に、制作者である江戸時代の職人達の声が聞こえてきたような気がしました。「この型紙を作った我々の職人魂を、活用して現在に通用するように再生して下さい。」そう言われているような気がしてきました。また、この型紙のデータベース化により、京都新聞の記事やKBS京都テレビ物づくり紹介コーナーに出演することとなり、より多くの人に知って頂く機会を設けてもらいました。

私達は、先生方に頂いたアドバイスを現実に活用できるように、新製品や新技術を開発しています。そして現在は、単に江戸時代の職人、庶民の魂の継承と新製品の開発を行うだけでなく、それを通じて、日本の再生と復興を目指しています。その際にいつも思うのは、江戸時代に現在の科学や技術、機械等があれば、江戸時代の職人達は、どのような製品を作ったのだろう、ということです。この想いをヒントに、京小紋の型紙の活用方法を探っています。

型紙の再生

現在、開発できた技術は、紙、布、木、石、金属、そして、化学樹脂やカーボンといった様々な材料に、現代の機械を用いて印刷、加工する技術です。試作を繰り返し、その中で、新製品も開発し、ようやく様々な協力者の方々から、「面白い」という評価の言葉を聞かせ頂けるようになりました。
しかし、ここまで来るのに大変な時間がかかりました。最初に試みたことは、江戸時代の型紙の再生です。しかしこれは未だに終わっていません。技術者のところに相談に行くと、最初の内は、皆さん「簡単や、直ぐ出来る」と言います。しかし、徐々にそれがどんなに難しいことかが分かってきました。紙は軽く、熱に弱い性質を持ちます。これらを始めとして色々な原因から、型紙の機械による再生は非常に困難であることが分かりました。



小紋柄襖

次に、新製品開発として、和紙への印刷による、襖紙や障子紙の製作を行いました。柄の拡大や45 × 28㎝程度の型紙を拡大、柄合わせ等を行い、現代技術を用いた襖紙の再生を試みました。1 × 2 m以上の和紙へ、細やかな小紋柄を出力するというような点には、大変苦労し、幾度もの試作を重ねてきました。この際に、野村松型紙店の野村氏や木村表具店の木村光男氏、IHKの田中日登志氏、スリーマスト京都㈱の宮川二郎氏等、多くの人達の協力を得て、最近ようやく完成し、実用化することが出来

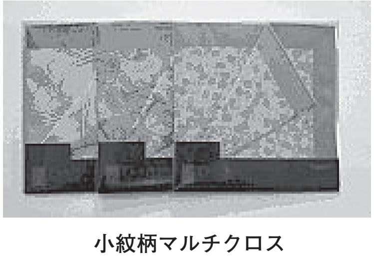
ました。

化学樹脂の製品開発としては、上述した野村氏、㈲佐野漆芸の佐野勝氏の協力の下、漆塗りのスイッチプレートやコンセントカバーを製作しています。また、2008年度の第６回全日本学生フォーミュラ大会では、京都大学のフォーミュラチームと協力し、漆塗りのフォーミュラカーを作成しました。上述した佐野氏の協力の下、全体を黒い漆で塗装し、さらに京都大学のイメー

漆塗フォーミュラーカー

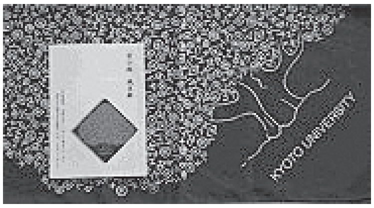
ジカラーである青で小紋柄の模様を吹き付けました。幾何学的な細かい柄が集まって、遠目には１本のライン、近づいてみると京小紋柄の模様を持つ漆塗りのフォーミュラカーは、全国の大学の車輌の中でも異才を放ち、大会の会場では多くの人の注目を集めました。

2011年８月には、東レ㈱と協力し、京小紋柄のマルチクロスを発売しました。この時には有難いことに、京都新聞の記事にして頂き、世の中に「京都の伝統文化が生きるアイテム」として、紹介することができました。



小紋柄マルチクロス

また、今年３月には、京都大学生協と協力し、風呂敷を作成しました。京都大学のシンボルとなっている楠と、明治時代に使われた京小紋の「ABCアルファベット記号」の柄を組み合わせ、それぞれの意味を融合し、新たな謂れを持つデザインに仕上げました。



小紋柄風呂敷

実際の製品を創り出せたことで、ようやく協力者だけでなく、外部の方に、その反応を伺うことができました。皆様に「良く出来ている」という言葉を聞かせて頂きました。これには関係者一同、喜ぶと同時に、次へと繋がるよう、切磋琢磨しております。

布の製品開発に関しましては、㈱スリーエース阿部氏の紹介により、長年京都で染色業を行ってこられた、西田染工㈱の西田庄司氏や大興産業㈱の協力を得ることが出来ました。小紋柄による金属板加工に関しても、㈲今西鉄工所の今西文彦氏はじめ、多くの紹介された方々の協力を得ました。また、金属板を組み合わせて、照明器具を製作しました。製作に関しては、㈱山本木材工業高嶋氏や漆塗りの佐野氏の協力を得ました。この電源には富士電機㈱の太陽光パネルを用い、誰もが簡単に発電することができる技術も併せて開発しました。この開発は、テクノナレッジ・システム㈲の小林正和社長のお陰です。その後、蓄電器の開発や、太陽光パネルの彩色、小紋柄のプリント等、共同開発を進めてきました。

小紋柄照明

Japan　Expo2012 に出展

そして今、この様な試作品を持って、今年７月に、フランスのパリで行われる、JapanExpo2012 に出展する予定です。日本の伝統技術が､現在の世界に通用するか、試みようと思っています。これには、４年前に出会ったフランス人留学生のニコラ君との出会いと信頼関係が、大きく寄与しています。彼は日本人よりも日本人の心を持つフランス人で、日本の伝統と文化を伝えることを目的に、日仏をまたいで活動しています。彼の助けがなければ、フランスでの出展は不可能でした。

私は京都において、日本の伝統的知的財産による新製品、新アイデア企画を行い、これによる日本復興と再生を目指しています。

江戸時代には、欧米列強が日本に押寄せました。平成の時代は、日本復興再生を目指して、職人魂と連携を持って欧米へ船出していく時代だと確信しています。製品と共に職人魂を輸出しなければなりません。ここに至るまで、何年も前から、多くの学生諸君が関わってくれました。10 年以上前から現在に至るまで､共に歩んでくれた、京都大学の学生諸氏に衷心より感謝する次第です。彼らの若いエネルギーと情熱が、ここまでの人との関わりを生み、人を動かし、新しい製品開発と進むべき道を示してくれました。

おわりに

東北の再生復興、日本の復興と再生、くらしと協同の研究所・『くらしと協同』の出版、当社の江戸時代の知的財産の活用と再生。

それら一つ一つの出会いが､目的を結び、繋がりました。新たな出発の時期にお出会い出来たのもまた縁であり、必然の出会いの不思議に驚いている次第です。

このような絆で結ばれた、組織が、発信する情報が、大きな動きと行動となり、社会に影響や希望を提供できることの一事例になれば幸いだと思ます。

こうした動きがさらに盛んになることで、日本の技術が継承され、日本人が、日本の伝統産業が、往時の勢いを取り戻し、日本の復興再生に寄与することを切望しています。

一人では何もできません。日本の存在と発展は、魂なくして語れません。みんなで手を繋ぎ、この危機を乗り越えましょう。